

池田西遺跡

-市立保健福祉センター及び市立西老人福祉センター建設工事に伴う発掘調査概要報告書-

1998. 3

寝屋川市教育委員会

序

池田西遺跡は、寝屋川市の池田西町に所在する弥生時代～江戸時代の複合遺跡です。平成5年の府営池田住宅の建て替え工事に伴う大阪府教育委員会の発掘調査で、古墳時代の井戸・奈良時代の建物跡が発見され、この地に地下深くに遺跡が眠っていたことが判明しました。同時に、奈良時代の墨書き土器が出土したことから、官衙遺跡との関連からも、当遺跡が一躍注目されることとなりました。その後も、府営住宅建て替えに伴う大阪府教育委員会の調査は継続して行われており、弥生時代中期の竪穴住居跡・古墳時代の建物跡等の遺構が発見されており、寝屋川市西部を代表する遺跡となっています。

今回の発掘調査は、遺跡の北東に隣接する場所にあたり、平成7年度に行った試掘調査の結果、平安時代後期の土器が出土し、遺跡の広がりが確認されました。平成8年7月～9月に行った発掘調査によって、平安時代後期～鎌倉時代の集落遺跡の存在が判明しました。これまでの府営住宅の調査地では不明であった、当該期の集落の状況を考える上で、重要な資料を得ることができました。

本報告書は、平成8年度に実施した発掘調査と、平成9年度に実施した遺物整理の概要をまとめたものです。本書が寝屋川市さらには淀川下流域の歴史の研究の基礎資料として活用され、歴史や文化財に対する理解を深める一助となることを切に希望します。

なお、調査の実施にあたりましては、ご理解・ご協力を賜わりました関係各機関・関係各位に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査・遺物整理に携わった方々に、深く感謝の意を表します。

今回発掘調査を行った池田西遺跡をはじめ市域の西部では、近年の開発に伴う発掘調査で新発見の遺跡が相次いでおり、広く遺跡が存在することが明らかになっています。寝屋川市教育委員会では、私達の祖先が残し、あるいは受け継いできた様々な文化財の保存をはかり、私達の子供達に伝えていくために、平成8年12月に寝屋川市文化財保護条例を制定いたしました。今後は、この条例の精神に基づき、文化財保護行政を進めていく所存ですので、ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成10年3月

寝屋川市教育委員会

教育長 鈴木 隆

例　　言

1. 本書は寝屋川市が計画した市立保健福祉センターおよび市立西老人福祉センター建設工事に伴って実施した、寝屋川市池田西町所在の池田西遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査および遺物整理に要した費用は、すべて寝屋川市が負担した。
3. 遺跡の有無を確認する試掘調査は、平成7年11月23日に実施した。現地調査は、平成8年7月25日から開始し、同年9月3日に終了した。また、本書の作成にかかる遺物等の整理作業は、平成9年度事業として実施し、平成10年3月31日に終了した。
4. 試掘調査は、寝屋川市教育委員会文化振興課文化財保護係塙山則之が担当し、発掘調査および遺物整理は文化財保護係濱田延充が担当した。調査事務等については、文化財保護係古村淳子の協力を得た。
5. 本書の編集・執筆は濱田が行った。また、本書に掲載した遺物実測図の作成・浄書は、濱田のほか調査内業補助員があつた。
6. 現地調査および遺物整理にあたり、下記の方々にご指導・ご教示を賜わった。記して謝意を表します。
(順不同・敬称略)

尾上実・佐久間貴士・阿部幸一・杉本清美（大阪府教育委員会）、橋本久和（高槻市立埋蔵文化財調査センター）、宮崎泰史（大阪府立弥生文化博物館）

7. 遺物整理作業等に従事したのは、下記の方々である。

〔内業補助員〕谷本由紀、林美穂

〔内業作業員〕川瀬澄子、鍋島真弓美、橋本千恵子、藤戸房江

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	3
第3章 遺跡の地理的・歴史的環境	5
第4章 調査の成果	10
1. 基本層序	10
2. 検出された遺構	12
3. 出土遺物	21
第5章 まとめ	28

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図	1
第2図 池田周辺遺跡調査区位置図	5
第3図 遺跡位置図	6
第4図 池田下村遺跡（95-1区）古墳時代遺構略識図	7
第5図 池田周辺遺跡出土遺物実測図	8
第6図 堆積土層柱状模式図	10
第7図 II区北壁断面実測図	11
第8図 調査区遺構配置図	13
第9図 I区土坑1・3～6平面および断面実測図	15
第10図 I区土坑2平面および断面実測図	16
第11図 I区柱穴平面および断面実測図	17
第12図 I区溝断面実測図	18
第13図 II区大溝および落ち込み断面実測図	19
第14図 I区出土土器実測図	22
第15図 試掘調査No1トレンチ出土土器実測図	24
第16図 II区出土土器実測図	26

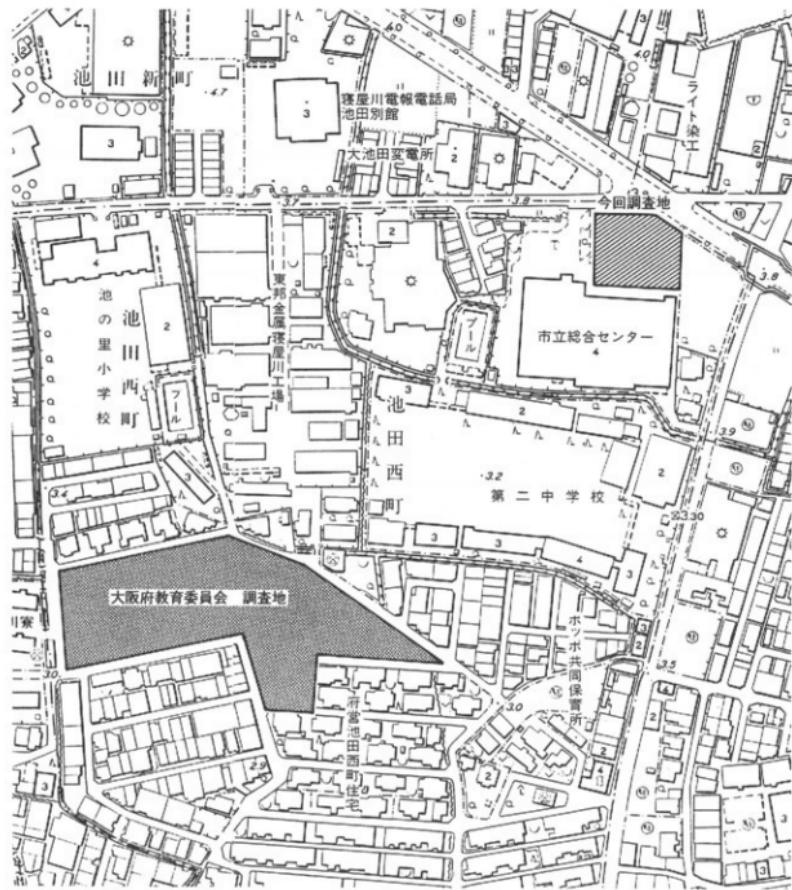
写 真 図 版 目 次

図版1 検出遺構（1）	a. I区調査区全景（南から） b. II区調査区全景（南から）
図版2 検出遺構（2）	a. I区土坑2南北土層断面（西から） b. I区土坑2完掘状況（南から）
図版3 検出遺構（3）	a. I区土坑3検出状況（西から） b. I区土器溜検出状況（南から）

- 図版4 検出遺構（4） a. I区北側溝内（土坑1）瓦器椀出土状況
b. I区土坑1瓦器椀出土状況
c. I区土坑2牛下頸骨出土状況
- 図版5 検出遺構（5） a. II区大溝全景（西から）
b. II区大溝東西サブトレント断面（南東から）
- 図版6 出土遺物（1） 瓦器椀
- 図版7 出土遺物（2） 土師器皿
- 図版8 出土遺物（3） 上師器皿・瓦器椀・土製かまど・滑石製石鍋
- 図版9 出土遺物（4） a. 瓦器椀
b. 瓦器椀
c. 羽釜・鉢・甕ほか
- 図版10 出土遺物（5） a. 白磁・青磁・陶器ほか
- 図版11 出土遺物（6） a. 瓦
b. 土師器皿
c. 土師器羽釜
d. 獣骨

第1章 調査に至る経過

池田西遺跡は、寝屋川市西部の池田西町を中心に広がると考えられる遺跡である。1988年（昭和63年）に、今回の調査地の南側に位置する府営池田住宅の建て替え工事が計画され、大阪府教育委員会では埋蔵文化財の有無を確認するため、工事区域での試掘調査を順次実施した。平成4年2月に実施した第2期建て替え工事に伴う試掘調査によって、工事区域の北側で遺構・遺物が検出され、遺跡の存在が明らかになった。この第2期および第3期建て替え工事区域で事前発掘調査が実施され、弥



第1図 調査地位置図 (S = 1 : 2500)

生時代の堅穴住居跡、古墳時代・奈良時代の建物・井戸・溝等の遺構と、弥生～江戸時代の遺物が出土し、弥生時代～近世の複合遺跡であることが判明している。⁽¹⁾特に、「葛二」「東家」等と書かれた奈良時代の墨書き器の出土は、役所（官衙）との関連が指摘されている。

今回の調査地は、遺跡の北東に隣接しており、寝屋川市が（仮称）総合保健福祉サービスセンターおよび西部方面老人福祉センターの建設を計画し、1995年（平成7年）6月21日付けで寝屋川市・市長公室・特定施設準備室から開発行為事前協議申請書が提出された。寝屋川市教育委員会では現状では遺跡の範囲外であるが、遺跡に隣接し、遺跡の広がりが想定されることから、事前に試掘調査を実施して遺跡の有無を確認する必要がある旨を回答した。

試掘調査は、同年11月23日に実施した。開発予定地内に3ヵ所の調査区を設定し、主に機械によって掘削を行い、堆積土層の把握と遺構・遺物の検出に努めた。第1トレンチおよび第2トレンチで遺構が検出されたほか、全ての調査区から11～12世紀の遺物が出土し、当該期の遺跡の存在が判明した。教育委員会では試掘調査の報告を行うとともに、担当部局と遺跡の保存について協議を行った。建物は杭基礎構造で、しかも地下には駐車場等の利用が計画されており、遺跡の現状での保存は困難なため、建設工事で遺跡の破壊が想定される部分について事前に発掘調査を実施することとし、同年12月27日付けで協議書を締結した。調査の方法については、試掘調査の所見から多量の湧水が想定されたため、本体工事に伴う連続地中壁の建設後に本体工事を一時中断して発掘調査を行うこととした。

寝屋川市教育委員会では、平成8年7月18日付け社文第1257号で文化財保護法第98条2に基づく発掘調査の通知を大阪府教育委員会に提出し、本調査区を池田西遺跡ⅠDN96-1区として7月25日より発掘調査に着手した。

註

1. 阿部幸一『池田西遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会 1994

大阪府教育委員会『池田西遺跡現地説明会資料』 1996

大阪府教育委員会『池田西遺跡現地説明会資料』 1997

第2章 調査の経過

調査は、連続地中壁工事の終了後、7月25日より開始した。調査は、掘削土上の仮置き場の確保のため調査地全体を東西にはば2分し、西側をI区、東側をII区として、I区より調査を進めることとした。なお、試掘調査の所見から現地表下1m以下ではかなりの涌水が想定されたため、調査区内に簡易ディープウェルを設置し、地下水の排水を行って調査を進めた。

I区の調査は、7月25日より現地表下1.4mまでの盛土・水田旧耕土および無遺物層と考えられる洪水砂層等の機械による除去を開始した。7月27日に機械掘削を完了し、ただちに人力での調査に移行した。I区調査中は、天候に恵まれる一方、例年ない猛暑の中で、順調に進めることができ、柱穴・溝・土坑等の多数の遺構を検出した。調査期間短縮のため遺構平面図の作成については、写真測量を利用することとし、クレーンを利用して撮影した写真から1/20および1/100の図化を行うこととした。この他の調査区周壁の上層断面、遺物の出土状況、遺構埋土の堆積状況等については、人力で図面の作成を行った。また、主要な遺構・遺物の検出状況については、35mm小型カメラを使用して、白黒ネガフィルムおよびカラーポジフィルムで撮影を行っている。8月14日にクレーン車による写真を撮影することとなったが、撮影前夜に台風の通過によるかなりの降雨があった。撮影当日は台風通過後の好天となり、なんとか無事に撮影を実施することができた。8月15日にI区の調査を完了した。

8月19日より調査を再開し、II区の機械掘削に開始し、8月20日からは、人力掘削での調査に移行した。8月末からは、午後には毎日のように激しいスコールのような夕立にみまわれて、作業の中止を余儀なくされた。9月6日にI区同様にクレーン車により写真測量用の写真を撮影後、調査区内に幅1m・長さ10m・深さ1mのトレーナーを設定し、堆積土層の確認を行って、現地発掘調査を完了した。

出土遺物は遺物収納コンテナ約10箱および、瓦器・土師器等の土器や動物骨がある。これらについては、平成8年9月26日付け寝屋川警察署あて埋蔵文化財発見届出書を提出するとともに、大阪府教育委員会あて埋蔵文化財保管証を提出した。

遺物整理作業は、平成9年度事業として平成9年8月1日より開始し、遺物の接合・復元・実測等の作業を行い、本概要報告書の刊行を行って終了した。

調査日誌抄

7月25日（木）I区機械掘削を開始。調査区南側で土師器皿の集積遺構検出。

27日（土）I区機械掘削完了。

29日（月）人力掘削開始。南側より遺物包含層（第N層）掘削。

30日（火）土師器皿集積遺構の遺物取り上げ。

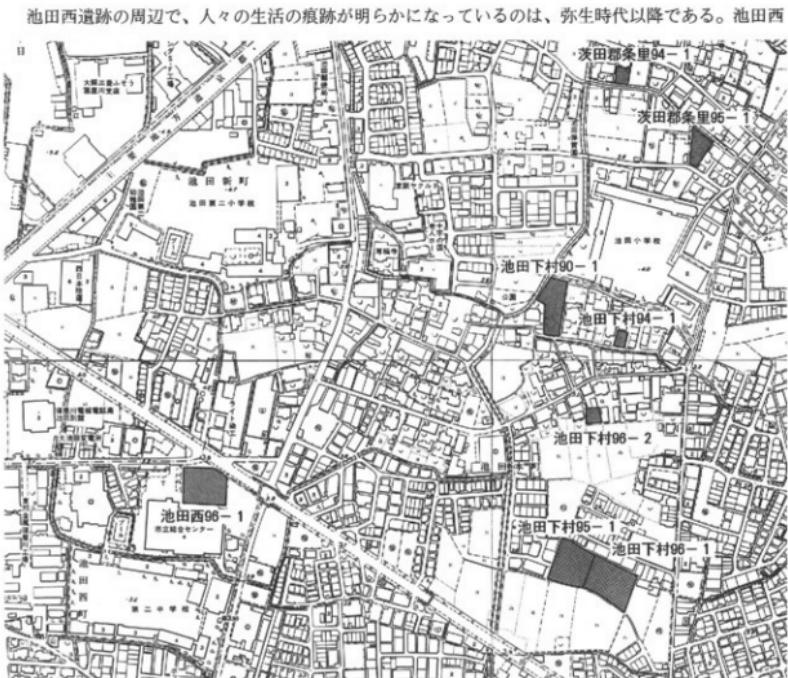
- 8月 1日（木）土坑1検出。完形に近い瓦器碗出土。濱田は午前中、開発に伴う立会調査。午後3時過ぎにわか雨。
2日（金）包含層掘削。最高に暑い。
3日（土）包含層掘削完了。土坑2・溝1検出。
5日（月）土坑2掘削。馬の下顎骨出土。
6日（火）土坑2掘削。土坑1写真撮影・断面実測。濱田は午前中、開発に伴う試掘調査。
7日（水）遺構面精査。土坑3・4・南側柱穴群検出。
土坑3より土師器皿3点出土。
8日（木）土坑2断面実測。南北セクションを残して、東西セクションをはずす。
土坑4がさらに1段深くなることが判明。
9日（金）土坑2、底まで掘り下げ完了。
土坑4・6・南側柱穴群の写真撮影、実測。
10日（土）北側柱穴群検出。
12日（月）南側柱穴群の写真撮影・実測完了。
13日（火）土坑2、南北セクション写真撮影・断面実測。台風の影響か、午後2時にわか雨。
14日（水）土坑2、セクションをはずして完掘。遺構面の全面清掃。
総合センター屋上および足場から写真撮影。台風接近し、風が強くなる。
15日（木）昨夜、台風通過。濱田午前7時前から一人で排水と白線の補修を行う。
午前10時～12時に、クレーン車による写真撮影完了。
I区調査完了。
19日（月）現場再開。II区機械掘削を開始。
20日（火）機械掘削完了。
I区地盤改良工事に立会し、下層より古墳時代の須恵器を発見する。
21日（水）人力掘削開始。遺物包含層（第IV層）掘削。
22日（木）北側で落ち込み検出。北側の壁いっぽいまで調査区を拡張する。
南側に攪乱が多数存在することが判明。
23日（金）包含層掘削完了。遺構面の精査にかかる。中央で南北方向の大溝検出。
26日（月）東側で水田遺構を検出。
大溝にサブトレンチを設定し、堆積土層の確認を行う。
27日（火）雨天のため作業中止。
28日（水）大溝・落ち込みを掘削。大溝東側肩部で瓦器碗出土。
落ち込み肩部では杭列を検出。
午後4時過ぎに激しい雷雨。
29日（木）昨夜から大雨・洪水警報が出たまま（午前8時前に解除）で作業中止。
午後、大阪府教育委員会池田西遺跡調査事務所で、佐久間貴士氏と打ち合わせ。
30日（金）排水と遺構面精査。午後4時過ぎに再び激しい雷雨。
大阪府教育委員会 尾上実氏・高槻市埋蔵文化財調査センター 橋本久和氏来訪。出土遺物についてご教示いただく。
31日（土）夕方作業終了後、またも激しい雷雨。
9月 2日（月）落ち込みを完掘。下部は厚い粗砂層で自然河川であることが判明。
4日（火）遺構面清掃。総合センター屋上および足場より写真撮影。
6日（木）大阪府教育委員会 佐久間貴士氏来訪。地層の対応関係についてご教示いただく。
遺構面清掃。午後1時にクレーン車による写真撮影。
トレーナーを設定し、下層の遺構・遺物の有無を確認。
調査完了。

第3章 遺跡の地理的・歴史的環境

寝屋川市は、生駒山地からびる丘陵が大部分を占める市域東部地域と、淀川・寝屋川等の河川が運搬してきた土砂の堆積によって形成された低湿な平野が広がっている市域西部地域に、地形的には大きく二分される。市域西部地域は、現地表面の標高でも5m未満で、最近まで大雨等による住宅の浸水や道路の冠水があるような水はけの悪いところが広がっており、人々が生活するのに不適な場所のイメージがあり、遺跡の存在の希薄な地域とされてきた。

しかし、近年の大規模な土木・建設工事により、遺跡の存在が明らかになってきた。これらの遺跡は、おおむね現地表下1m以上の深さで存在し、近代以降の工事による削平等の破壊を受けておらず、比較的良好な状況で遺存しているケースが多い。

この地域は、古代律令期の茨田郡域に相当する。ここでは当地域の遺跡の動態を中心とした歴史的環境を概観しておく。



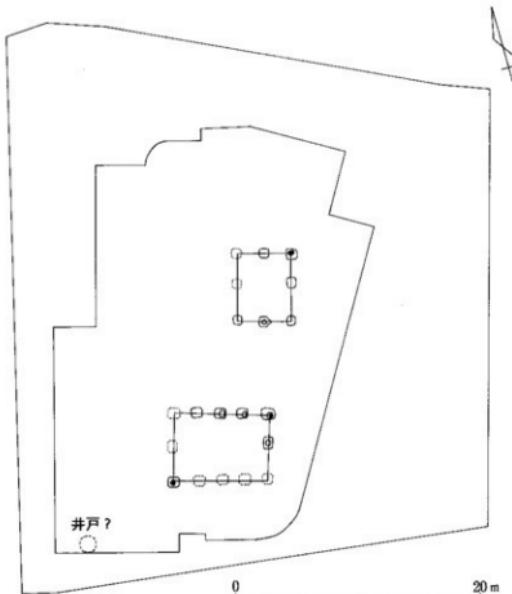
第2図 池田周辺遺跡調査位置図 (S=1:5000)



- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------|
| 1. 池田西遺跡 | 2. 楠遺跡 | 3. 池田下村遺跡 | 4. 高柳遺跡 | 5. 神田東後遺跡 |
| 6. 高宮八丁遺跡 | 7. 長保寺遺跡 | 8. 中神田遺跡 | 9. 大庭北遺跡 | 10. 梶遺跡 |
| 11. 宮野遺跡 | 12. 常称寺遺跡 | 13. 古川遺跡 | 14. 普賢寺遺跡 | 15. 茨田郡条里遺跡 |

第3図 周辺遺跡位置図 (S = 1 : 25000)

遺跡の府営住宅1996年度調査地で、弥生時代中期後半の竪穴住居跡1棟が検出されている。周辺の調査地でも中期後半～末の遺物の出土が報告されており、集落の存在が推定される。ただし、遺構・遺物の密度は極めて低く、その規模については大きく考へることはできない。一方、調査地の北東に位置する茨田郡条里遺跡内の池田1丁目では、試掘調査で柱穴・土坑が検出され、中期後半～末の良好な遺物包含層が存在し、集落の存在が推定される。この遺跡の南側に隣接する池田下村遺跡でも、同時期の土器が出土している。

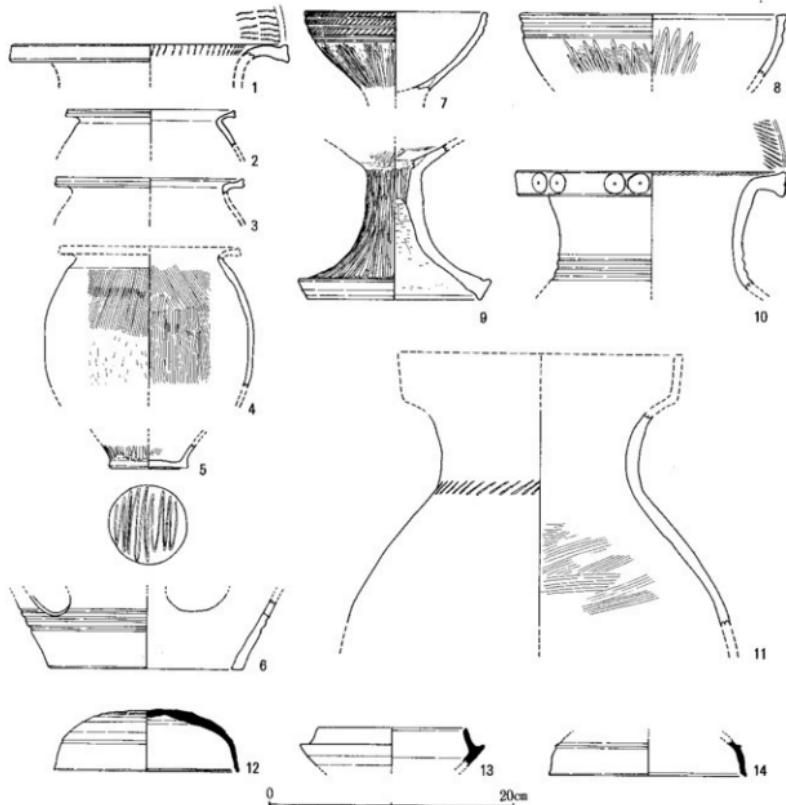


第4図 池田下村遺跡95-1区 古墳時代遺構略測図($S = 1 : 400$)

茨田郡域では、守口市八雲遺跡（中期初頭）、門真市普賢寺遺跡（前期末）、古川遺跡（中期初頭）、大東市西諸福遺跡（中期初頭）、大阪市森少路遺跡（前期末～中期）など前期末～中期初頭の遺跡が知られていた。高柳遺跡では後期前葉の竪穴住居跡が検出されており、古川流域の本市西部に中期から後期の集落が展開している可能性が高い。なお、門真市の京阪電車大和田駅構内から扁平鉗式四区袈裟津文銅鐸が複数個体出土しており、こうした古川流域の集落との関係が注目される。

古墳時代の遺跡としては、池田西遺跡の府営住宅1994年度調査地で古墳時代中期後半の井戸が検出されており、1996年度調査地では掘立柱建物が検出されている。本調査区でも数点の古墳時代の須恵器の破片が出土している。この時期の茨田郡域の遺跡としては、本市石津南町の楠遺跡、池田本町の池田下村遺跡のほか門真市の宮野遺跡、守口市梶遺跡、大庭北遺跡が知られている。いずれも中期以降の時期であり、前期の遺跡は守口市八雲遺跡を除くと皆無である。『日本書紀』によると仁徳期に「茨田堤」の築堤と、「茨田屯倉」の設置について記されており、国家主導の大規模な開発がこの時期に行なわれた可能性がある。上記の古墳時代中期におけるこの地域における遺跡の増加も、この記述と関連するとと思われる。

奈良時代の遺跡としては、池田西遺跡の府営住宅調査地で多数の掘立柱建物が検出されている。「東家」・「東」・「葛二」等と書かれた墨書き土器が出土しており、官衙との関連が指摘されている。



第5図 池田周辺遺跡出土遺物実測図(1~9:茨田郡条里94-1区、10~11:池田下村95-1区、12~13:同96-1区、14:同90-1区)

池田西遺跡の南側に所在する長栄寺には、付近より出土した凝灰岩製藏骨器（寝屋川市指定文化財）や、古瓦が所蔵されており、古代寺院の存在が推定されている。この寺については、藤澤一夫氏が「茨田寺」ではないかと推測されており、茨田郡衙が付近に存在した可能性を考察されている。

平安時代前半の遺跡としては、高柳遺跡・神田東後遺跡があげられる。高柳遺跡では、石製帶金具・中国製白磁碗のはか大量の綠釉・灰釉陶器が出土しており、有力豪族の居宅と推定されている。なお、本遺跡の所在する池田から北側の石津・田井・木屋にかけて条里畦畔の痕跡が認められるが、条里の施行起源については解明されていない。池田郷は、『倭名類聚抄』に河内国茨田郡八郷の一つとして記されているが、当時期の遺跡の様相については、少量の遺物が府営住宅調査地で出土しているのみで、

明らかになっていない。

平安時代後半～中世の遺跡としては、池田西遺跡の本調査区をはじめ、寝屋川市中神田遺跡（13世紀）・門真市西三荘遺跡（11世紀）・古川遺跡（12世紀）・普賢寺遺跡（15世紀）・守口市大庭北遺跡（12～14世紀）が知られている。この時期に淀川流域では、数多くの荘園の記録が残されている。池田荘は、鎌倉時代以降皇室領として相伝され、南北朝時代には西園寺家領となったことが知られている。室町時代には、河内十七箇所の一つとして室町幕府御料所となっている。池田2丁目の喜多家墓地には「河内國茨田郡 池田郷 建武二年乙亥 十一月一日 三昧結衆中」の銘文をもつ五輪塔の一部（地輪）が残されている。

第4章 検出された遺構と遺物

1. 基本層序

調査区内での堆積土層の基本層序は第6図のとおりである。

第I層 現地表下約70cmまでは、水田に施した盛土層で。調査

開始までは、この上にアスファルト舗装を施して、駐車場として利用されていた。

なお、調査区南側では大型の擾乱が多数検出されたが、埋土内より1970年代の紀年銘のジュース250mlスチール缶が出土しており、南側に隣接する建物が市立総合センターとなる以前にボーリング場として使用されていた時に、付随した建築物の基礎の抜き取り穴であることが、判明した。

第II層 1970年代まで使用されていた水田の耕土および床土層。堆積層の厚さは、約30cm。

第III層 厚さ約20cmの砂層。洪水に伴うものと考えられる。今回の調査地の南側300mの府営住宅建て替えに伴う調査地でも同一の砂層が検出されており、広範囲に広がっている。こうした広範囲に広がる洪水砂層は、淀川の氾濫によるものと考えられる。機械掘削に伴って小片の磁器染め付け茶碗が出土しており、近世以降のものと、考えられる。

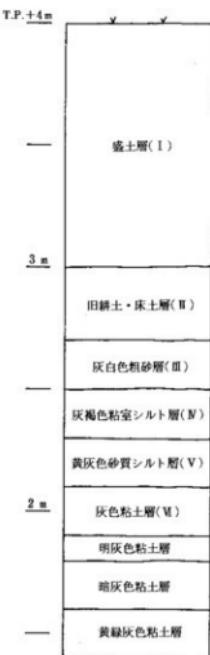
第IV層 灰褐色粘質シルト層。遺物包含層となっており、11世紀後半～13世紀の遺物が出土した。厚さは平均20cmであるが、I区中央付近では薄くなっている。

第V層 薄い黄灰色砂質シルト層。この上面より遺構が掘り込まれている。

第VI層 I区で第V層の下で認められた砂層である。この層から下位は面的な調査を行っておらず、トレンチ調査で堆積土層の確認をしたにとどまっている。

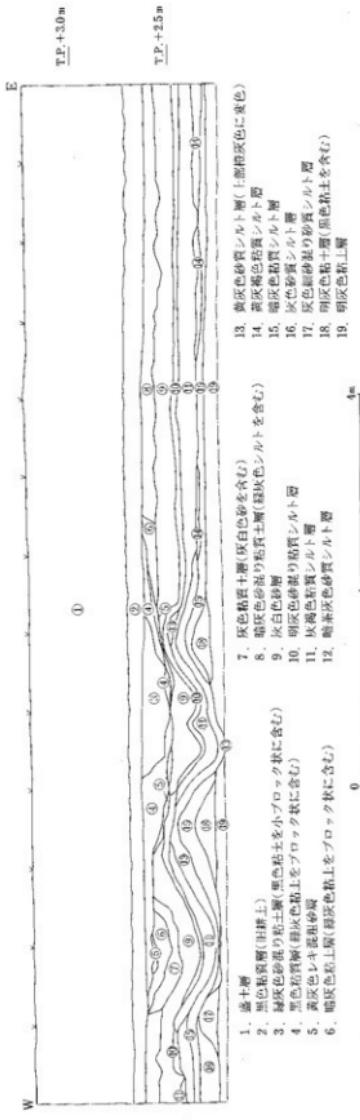
第VII層 灰色の粘土層。上部には黒色の粘土が薄く帯状に堆積している。遺物の出土もなく時期比定ができないが、上面は平安時代以前に利用された水田ではないかと思われる。

第VIII層 厚さ10cmの灰緑色の粘土層。



第6図 堆積土層柱状模式図

- 第X層 厚さ20cmの灰色粘土層。
- 第X層 厚さ10cm以上の黄緑灰色粘土層。
ここから古墳時代後期の須恵器等
破片が出土している。



第7図 III区 北壁断面実測図 ($S = 1 : 50$)

2. 検出された遺構

調査地では11～13世紀の遺物包含層である第IV層（灰褐色粘質シルト）を除去後、第V層（黄灰色砂質シルト）の上面で検出した。遺構面の標高T.P.+4.4～4.5mである。西側のI区では、遺構は北側と南側に集中して検出され、中央部は遺構の希薄な空閑地となっている。東側のII区では、中央に南北方向の溝が検出され、この溝の東側では珪片が検出された。

以下、各遺構について、説明を加える。

土坑1（第9図）

I区北東隅で検出された断面U字形の浅い土坑である。北側は調査地外にのびており、溝であった可能性もある。幅50cm、深さ20cmをはかる。埋土は三層に分かれ、上層より2点の完形に近い瓦器碗（図版4a・b）が出土している。瓦器碗は11世紀末に比定できるものである。

土坑2（第10図、図版2）

I区中央北側で検出された6m×5mの平面卵形の大型の土坑である。深さ1.4mをはかり、底では平面長方形の平坦面となっている。埋土は大きく3層に分かれ、下層は土坑が機能していた際に堆積したと考えられる粘土層である。中層は北側から流れ込んできたようなラミナの認められる砂質土の堆積となっている。上層は粘質土で人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

中下層の境目付近で、動物骨2点が出土している。この動物骨は、鑑定の結果、牛の下顎骨（図版4c）と中足骨（図版11d）であることが判明した⁽¹⁾。付近から完形の土師器小皿も数点出土しており、何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。上層からの出土土器は小片のものばかりで、量的にも少ない。土坑壁面から底面まで粘土層となっており、涌水が認められなかった。

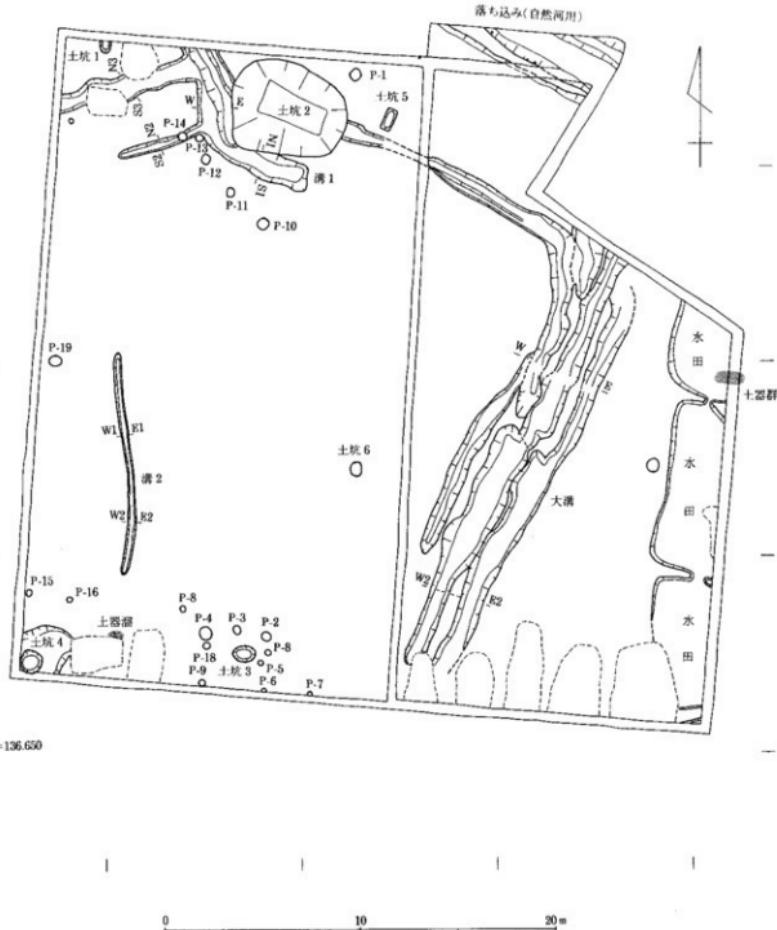
以上の所見から、本来の用途として井戸あるいはゴミ穴とは考えられず、水溜めのような用途をもっていたものと推察される。遺構は後述する溝1の一部を破壊しており、古い時期の土器も若干含まれているが、出土土器の最も新しい時期のものは13世紀後半に比定され、遺構も同時期の所産と考えられる。

土坑3（第9図、図版3a）

I区南側の柱穴群内で検出された、小型の土坑である。1.2m×0.85mの平面長円形で、深さ20cmの断面逆台形を呈する。埋土は4層に分かれ、粘質土・砂が堆積している。南側中央肩部で土師器小皿3枚が重なって埋納されたような状況で検出されている。小皿は12世紀に比定できるもので、柱穴群

Y=136.610

X=35.380
—



第8図 調査区遺構配置図 (S = 1 : 250)

と同時期のものである。遺構もこの柱穴群との関係で理解すべきと考えられる。

土坑4（第9図）

I区南西隅で検出された大型の土坑である。東側の一部が擾乱で破壊されており、西・南側は調査区外へのびている。約30cm掘って平坦な底を作った後、さらに直径1m・深さ40cmで一段深く掘込まれている。本来は、この部分に桶のようなものが設置されていた可能性が高い。出土遺物は、瓦器椀・土師器小皿・東播系須恵器等の土器が、少量出土している。11世紀後半頃の遺物が多いが、少片のため明確な遺構の時期を比定できない。

土坑5（第9図）

I区北側中央の土坑2の東側で検出された、平面長方形の土坑である。長さ1.2m・幅0.6m・深さ0.3mをはかる。埋土は大きく2層に分かれる。遺物は出土しておらず、時期等は不明である。

溝1

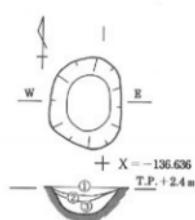
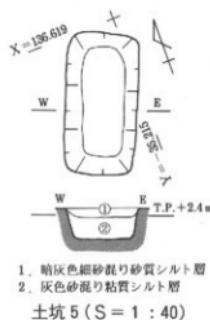
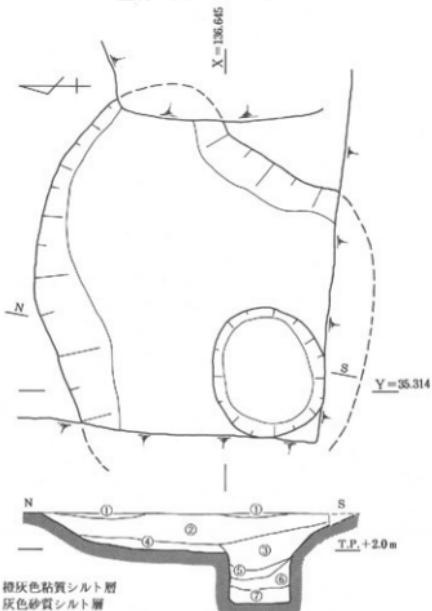
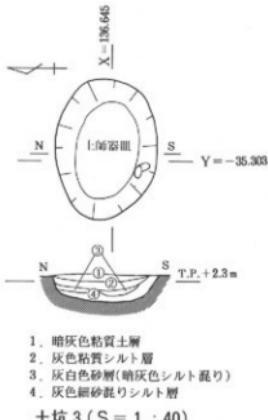
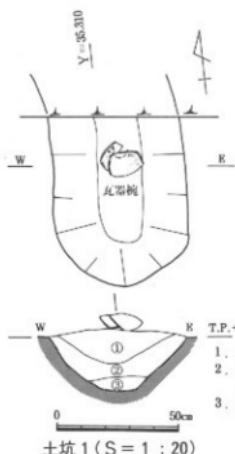
I区の北側で検出された。幅2m・深さ0.4mで、検出長約10mをはかる。北側は調査区外へのびている。一部を土坑2に破壊されている。調査区中央を北から南東に曲がる幅2m・深さ0.4mの本線に、東西方向の支線がとりつく。支線となる溝の深さは10~20cmと浅い。出土土器は、瓦器椀・土師器皿・甕などがあり、11世紀後半に比定されるできる。

溝2

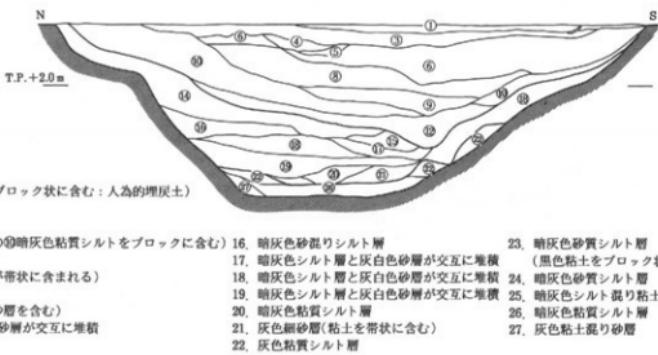
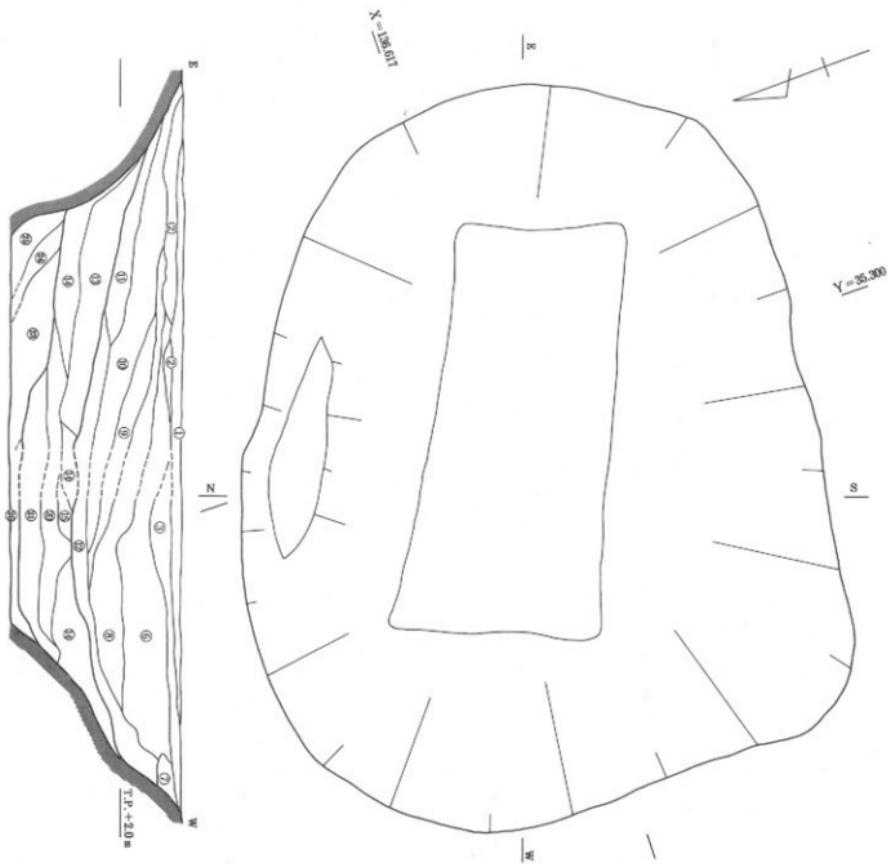
I区中央西側で検出した浅い溝状遺構である。長さ11.3m・幅0.3~0.4m・深さ7cmをはかる。埋土は灰色の粗砂混じり粘質シルトで、遺物は出土していない。

I区南側柱穴群（第11図）

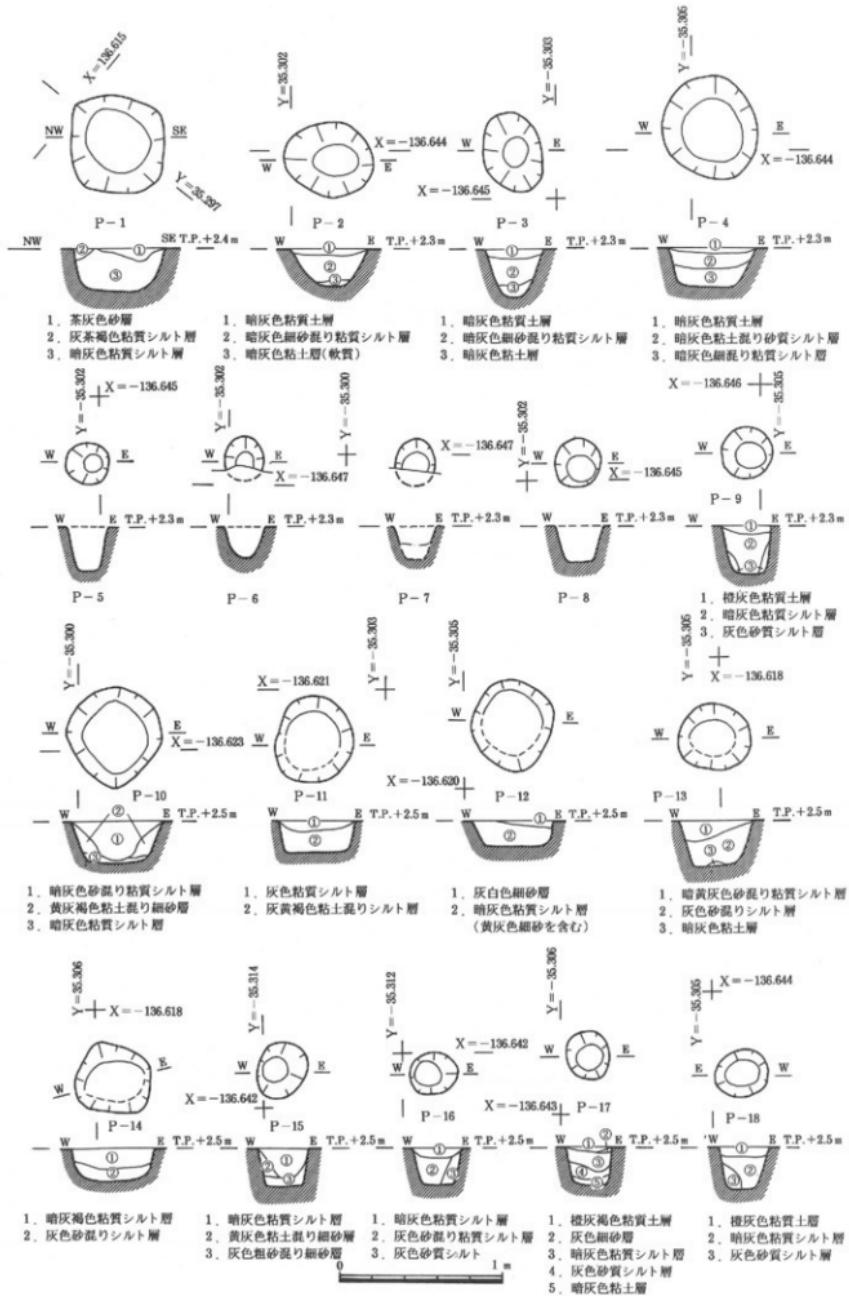
I区南側で柱穴12個がまとめて検出された。調査区内で建物を復元できなかった。柱穴は、直径30~60cm、深さ20~30cmをはかる。いずれの柱穴内にも柱根は遺存していなかったが、埋土の状況から柱の存在を推定できるものがある。遺構の埋土は、灰色~暗灰色の粘土・粘質シルト・砂質シルトである。P-8埋土から完形に近い瓦器椀が出土おり、12世紀に比定できる。他の柱穴も概ね同じ時期と考えられる。



第9図 I区 土坑1・3~6平面および断面実測図

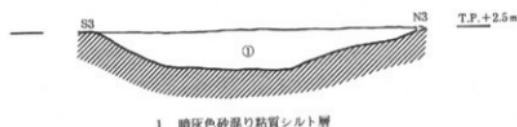
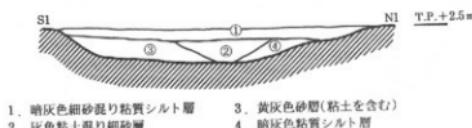
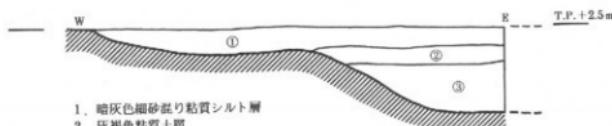


第10図 I区土坑2 平面および断面実測図 (S = 1 : 40)



第11図 I区 柱穴平面および断面実測図 ($S = 1 : 30$)

溝 1

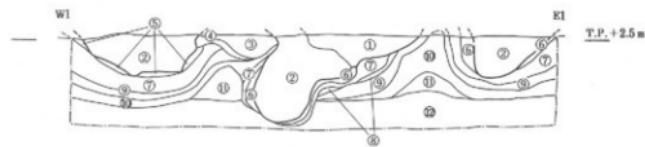


溝 2



第12図 I区 溝断面実測図 (S = 1 : 20)

大溝(サブトレンチ・北側セクション)



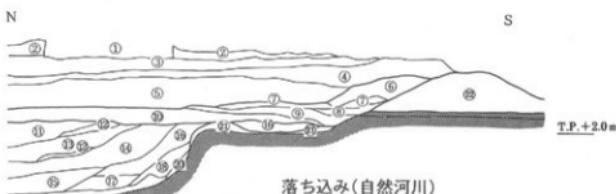
1. 灰色砂質シルト層(黒色粘土をブロックに含む)
2. 淡灰色粗砂層(灰色粘土を塊状に、黒色粘質シルトを帶状に含む)
3. 灰色粘質シルト層
4. 淡灰色砂質シルト層
5. 灰色砂混り粘質シルト層
6. 灰褐色砂質シルト層
7. 明灰色シルト層(上部は黄白色に変色)
8. 灰色粗砂混りシルト層
9. 灰色シルト層
10. 暗灰色シルト層
11. 灰色粘土層(灰黑色粘土が帶状に含まれる)
12. 灰色粘土層

大溝(南側セクション)



1. 灰色砂混り粘質シルト層
2. 灰褐色細砂混り粘質シルト層
3. 橙灰色砂質シルト層

0 2 m



落ち込み(自然河川)

1. 黄色粗砂層
2. 灰色粘質土層
3. 灰色粘土上層
4. 灰色細砂混り粘質土層
5. 暗灰色灰土粘質土層
6. 灰色粘質シルトと灰白色砂層が層状に交互に堆積
7. 灰色粘土混り砂層
8. 暗灰色砂混り粘土層
9. 灰色砂混り粘土層
10. 灰色砂混り粘質シルト層
11. 灰色砂混り粘土層
12. 黄灰色砂層(灰色粘土を含む)
13. 暗灰色砂混り粘土層
14. 暗灰色細砂混り粘土層
15. 淡黄色粘土層(茶黒色粘土を含む)
16. 灰色砂層
17. 黄系灰色粘土層
18. 灰系灰色砂層
19. 黄褐色粗砂層
20. 灰色粘土層
21. 灰色粘土上層
22. 明灰色砂質シルト層

0 2 m

第13図 II区 大溝および落ち込み断面実測図 (S = 1 : 40)

土器窪（図版3 b）

I区南側で、完形品を含む土師器皿が、まとまって検出された。南側で攪乱に接しており、検出状況も良好ではない。明瞭な掘方は検出できず、柱穴・土坑にはならないと判断される。土師器皿は5枚程度で、12世紀～13世紀の時期と考えられる。

大溝（第13図、図版5）

II区中央で検出された北東～南西にはぼ直線にのびる数本の溝の集合した遺構である。溝の方向は概ねN-30°-Eである。溝間には狭い土手状の高まりがあり、この高まりは断面観察の結果、さらに下層の灰色粘土層においても同様な高まりが観察され、平安時代以前（奈良時代？）の水田の大畦畔を踏襲していると考えられる。溝は最終的に江戸時代の洪水砂層で埋没しており、さらに一部はその後も掘り直しがされており、長期にわたって使用されていたと考えられる。

溝は南側では浅く、北側に向かって急に深くなっている。南から北に水が流れていると推定復元できる。大溝の東西では遺構を境に土地利用が変わっているが、遺構面のベースとなる堆積土層も東側では粘質シルト、西側では細砂層となっており大きく異なる。

水田

II区の大溝東側で東西方向の数本の畦畔が確認され、南北方向に並ぶ3枚の水田の一部を検出した。水田面は中期包含層となっている灰褐色粘質シルト層に覆われている。畦畔は、切れるところが認められ、この部分が水口となっていたと推定される。北側の水田埋土の上面より瓦器椀・土師器皿等がまとめて出土している（II区東側第IV層土器群）。これらの土器は11世紀後半～末のもので、水田の廃絶時期もおおむねこの時期に対応するものであろう。

落ち込み（第13図）

II区北端部で、肩部の一部が検出された。肩部は30cm程度の土手状の高まりとなっており、数本の杭跡を検出している。幅1m程度のテラスを形成後、急激に下がっていく。埋土は上部が粘質土、中部が粘質シルトと砂の交互の堆積、下部は厚い粗砂層となっており、下部の粗砂層からは激しい涌水が認められた。上部の堆積はほぼ水平方向であるのに対し、中層は斜め方向の堆積となっている。以上の所見から、本遺構は自然河川の南側肩部に相当する可能性が高いと思われる。

埋土上部より13世紀の瓦器椀等の破片、中部下位より完形に近い11世紀末の瓦器椀1点が出土している。遺構の時期もこれらの土器の示す時期に対応するものと考えられる。

3. 出土遺物

I 区出土土器（第14図）

溝1出土土器（第14図1～4）

瓦器碗（1）は、ほぼ完形品。口径14.8cm、器高5.9cm、底径5.5cmをはかる。内外面ともに緻密なヘラミガキを施す。口縁部内面のやや下がったところに沈線を巡らせる。内面見こみ部分の暗文は、螺旋状である。橋本久和氏の分類の楠葉型に属する⁽²⁾。

（2）～（4）は、瓦器碗の底部。（2）・（3）は、楠葉型で理解される。（2）は螺旋状、（3）は格子状の暗文が施されている。（4）はヘラミガキの幅が広く、和泉型に属すると考えられる。いずれも、高台はしっかりと作られている。

このほか、土製かまどの破片（図版8-71）が出土している。

土坑1出土土器（第14図5・6）

ほぼ完形の2点の瓦器碗（5・6）が出土している。（5）は口縁部内面に沈線をもたず、ヘラミガキの幅が広い、和泉型に属する。口径14.8cm、器高5.9cm、底径6.2cmをはかる。高台は高く、外頬気味に作られている。ヘラミガキは、内外面とも比較的密に施される。内面見こみ部分の暗文は、格子状。尾上実氏の編年のI-3期に属すると考えられる⁽³⁾。

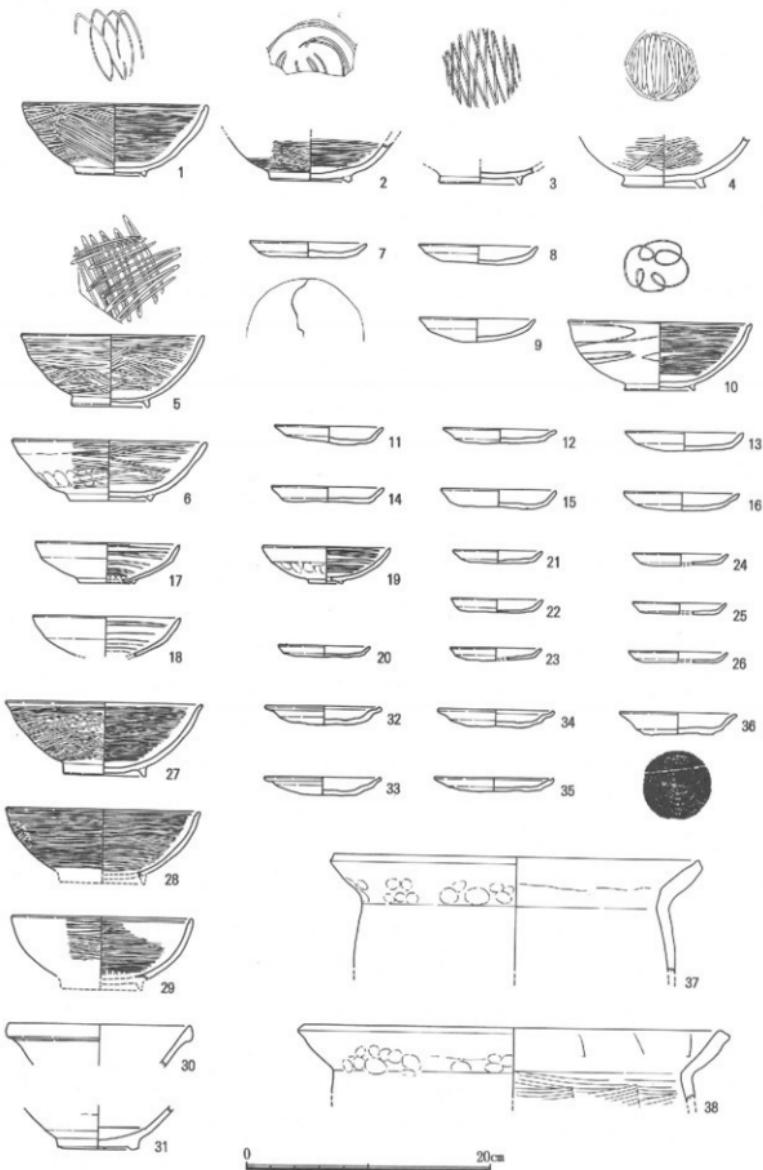
（6）は、器壁が厚く、直線的にのびる杯形の体部をもつ。口径15.6cm、器高6.0cm、底径6.4cmをはかる。体部外面には、指押さえの痕跡が明瞭に残っている。高台は、（5）と比較すると短く、断面三角形形状を呈する。内外面の調整はヘラミガキ調整。ヘラミガキの幅は広い。形態・調整の特徴からは、和泉型の範疇で理解できるものであるが、（5）との差は大きい。

土坑3出土土器（第14図7～9）

ほぼ完形品の土師器小皿3点（7～9）が、重なって出土している。口径9.5cm程度、器高1.5～2.0cmで、口縁部が「て」の字状となるものは無い。（7）は、外面の口縁部～中央に粘土の接合痕が観察される。色調は、（7）・（8）が淡乳灰褐色、（9）が明橙灰色を呈する。

柱穴P-8出土土器（第14図10）

遺構検出時に埋土の最上部から、ほぼ完形の瓦器碗1点（10）が出土している。瓦器碗は口径14.8cm、器高5.7cm、底径5.5cmをはかる。口縁部は横方向のナデ調整により外反気味になっている。口縁内面の沈線は、口縁部直下に施されている。体部のヘラミガキ調整は、内面は密に、外面は粗く施さ



第14図 I区出土土器実測図 (S = 1 : 4)

れている。見こみの暗文は輪状連結形である。以上の特徴は大和型として理解できるものであろう。

川越俊一氏の編年のⅡ-b～Ⅲ-a型式⁽⁴⁾、近江俊秀氏の編年のⅡ-1期⁽⁵⁾で理解できよう。

土器窯出土土器（第14図11～16）

ほぼ完形品の土師器小皿（11～16）・小片の瓦器碗が出土している。土師器小皿は、口径8.5～9.6cm、器高1.2～1.5cmに取まる。色調は、いずれも灰白色を呈する。

土坑2出土土器（第14図17～26）

上坑2は遺構規模と比較して遺物の出土は少なく、総量は遺物収納コンテナ1箱に満たない。瓦器碗・土師器小皿・瓦質土器羽釜・東播系須恵器甕（図版9c）等が出土しているが、大半は小片で図化できるものは少ない。遺物は下層～上層にまんべんなく出土している。中層上面ではほぼ完形の土師器小皿が出土している。

瓦器碗（17～19）は、比較的小片のもの。口径10～13cm、器高3cm程度で小型化しており、高台は退化している。外面のヘラミガキ調整は施されなくなっており、内面のヘラミガキ調整も粗く施されている。内面見こみ部分の暗文は（17）が螺旋状である。楠葉型で理解できるもので、橋本編年のN-1期に比定できる。

土師器小皿（20～26）は、口径7～8cm、器高1cm程度に小型化したものである。いずれも呈平な底部をもつもので、いわゆる「へそ皿」の形態となるものは無い。

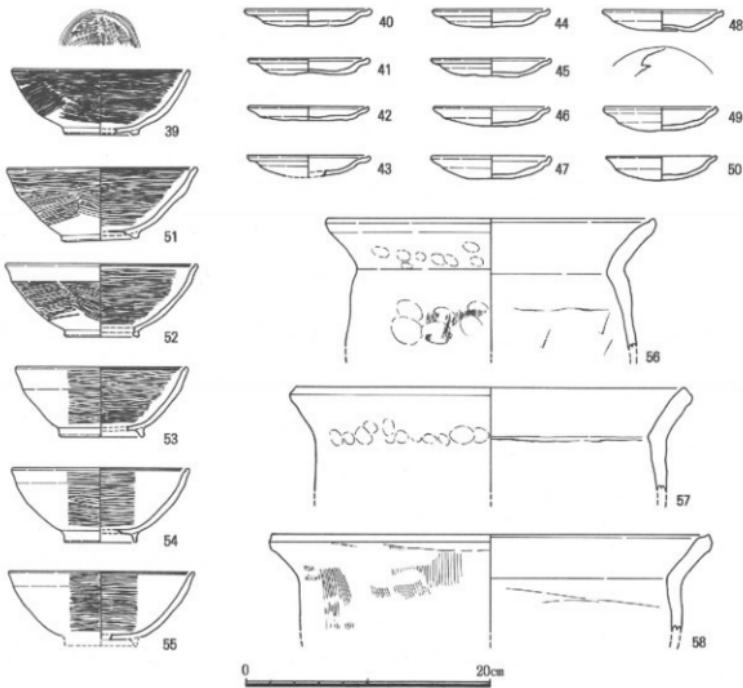
遺物包含層（第IV層）出土土器（第14図27～38）

瓦器碗（27～29）は、北側の溝1周辺で出土した。（27）は、口縁部内面に沈線が施されない和泉型の範疇に含まれるもの。内外面とも密なヘラミガキ調整が施される。外面のヘラミガキ調整の下にはヘラケズリが観察される。口径16.0cm、器高6.0cmをはかる。尾上編年のI-2期で理解できよう。（28）・（29）は、口縁部内面のやや下がったところに沈線が施される楠葉型の範疇に含まれるもの。（28）は口径15.6cm、（29）は口径14.6cmをはかる。

白磁碗（30・31）は、南側側溝で出土している。口縁部は玉縁形となり（30）、底部は厚く削り出している（31）。森田勉氏の分類のN類に属する⁽⁶⁾。

土師器小皿（32～35）は、「て」の字状口縁をもつもの。（35）は「て」の字状口縁がかなりくずれている。

回転台土師器皿（36）は、調査区南側出土。底部には回転ヘラ切り痕が観察される。回転台土師器



第15図 試掘調査No.1 トレンチ出土土器実測図 (S = 1 : 4)

は、本市では、淀川河床遺跡採集品に多く認められるほか⁽⁷⁾、長保寺遺跡から1点が出土している⁽⁸⁾。

土師器甕（37・38）は、器壁が厚く、受口状の口縁部をもつもの。口縁部外面には指押さえの痕が残っている。本市高柳遺跡・神田東後遺跡で10世紀前半の類品が出土している⁽⁹⁾。体部の調整は、外面はナデ、内面は（37）がナデ、（38）がハケメ。

試掘調査No.1 トレンチ青灰色シルト層出土土器（第15図39～50）

試掘調査時に、調査区北西に設定したNo.1 トレンチのG.L.-1.6~1.8mの青灰色シルト層から出土した土器である。土師器小皿はいずれも完形品に近いもので、一括廃棄された可能性が極めて高い。試掘調査の際には湧水のため、検出できなかったが、小土坑・柱穴あるいは土器窯のような遺構があつたと思われる。

瓦器甕（39）は、口縁部内面のやや下がったところに沈線を施す楠葉型と考えられる。器形は、大

きく歪んでいる。口径14.4cm、器高5.3cm、底径5.8cmに復元される。内外面に緻密なヘラミガキを施すが、内面見込み部分には暗文が施されていない。橋本久和氏の編年のI-2期に比定される。

土師器小皿(40~50)は、口径が9.0~10.0cmに収まる。(40)~(49)は、いわゆる「て」の字状口縁のものである。これらは、(49)を除くと、灰白色~乳白色を呈する砂粒のほとんど含まない精良な胎土となっている。胎土中に含まれるわずかな砂粒は、石英・長石を主体とする。(48)は、口縁部から中央部に向かって粘土の接合痕が明瞭に認められるもの。(49)は、器形の歪みが他のものに比べて大きい。胎土中には、石英・長石・雲母・チャートの細かい砂粒がやや目立つ。(50)は、「て」の字状口縁にならないもの。口縁内面には部分的に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと推定される。乳白色を呈するが、胎土中には(49)同様に細かい砂粒がやや目立ち、ざらつとした触感を与える。

試掘調査No 1 トレンチ茶褐色粘質土層出土土器 (第15図51~58)

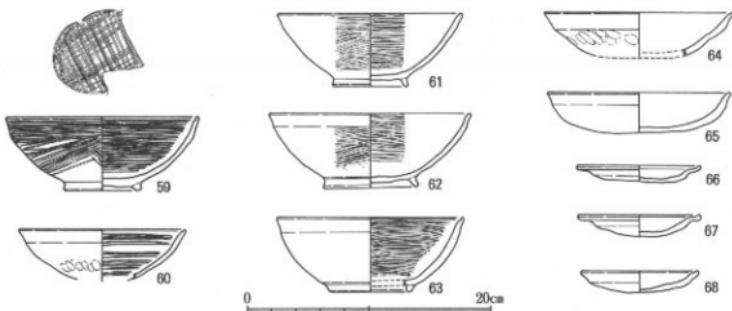
上記の青灰色シルト層の上部に堆積した茶褐色粘質土層から出土した土器である。図化できたのは瓦器碗および土師器甕のみで、土師器小皿は破片を含めてもほとんど出土していない。

瓦器碗(51~55)は、青灰色シルト層のものと比較すると、遺存状態は悪い。器表面の磨滅が著しく、ヘラミガキ調整の観察は極めて困難なものばかりである。(51)・(52)は体部が直線状にのびるもの。(51)は、完形近く破片が揃っている。体部中位~下位は、指オサエによる凹凸が著しい。(53)~(55)は、体部に丸みをもつもの。高台の作りには、端部に面をもたせ厚みをもつもの、細く尖らせるようにするもの、丸く肥厚させるものといったバラエティーが認められる。口径は14.0~15.5cm、器高5.5~6.0cm、底径5.5~6.0cmに収まる。調整の観察は困難なものが多いが、おおむね内外面ともヘラミガキ調整が密に施されている。いずれの瓦器碗も口縁部内面のやや下がったところに1条の沈線を巡らしており、橢葉型に分類できる。

土師器甕(56~58)は、いずれも器壁の厚いもの。内外面とも指オサエやハケメ調整の上からナデ調整をほどこしている。胎土中には、石英・長石・チャートを主体とする比較的細かい砂粒が多く含まれている。

白磁碗(図版10a-70)は、口縁部が外半ぎみにおわるもの。森田分類のII類に属する。

以上の土器は、基本層序の第IV層に対応する層位から出土しているが、試掘No 1 トレンチが、溝1の南側東西流路にあたっていること、北側では遺物包含層が薄くなっていることを考慮すると溝1の遺構埋土から出土した可能性もある。



第16図 II区出土器実測図 (S = 1 : 4)

II区出土土器（第16図）

落ち込み出土土器（第16図59・60）

瓦器碗（59）は、下層の粗砂層から出土のはば完形品。口径15.6cm、器高6.1cm、底径5.8cmをはかる。図化していないが、体部中位の外面には指オサエによる指頭圧痕が認められる。口縁部内面に1条の沈線が巡っている。内外面ともていねいなヘラミガキ調整が施されている。ヘラミガキの単位は細い。見こみ部分の暗文は格子状である。内外面とも炭素がかかって黒色を呈するが、外面の一部は炭素のかかりが悪く灰褐色を呈する部分がある。楠葉型で、I-2～3期と考えられる。

瓦器碗（60）は、中～上層出土。外面にはヘラミガキ調整が認められず、内面のヘラミガキ調整も粗く施されている。口径13.4cmに復元される。口縁部内面直下に1条の沈線が巡っている。外面は黒色、内面は銀黒色を呈する。楠葉型、III-1期に属すると考えられる。

大溝出土土器（第16図61）

瓦器碗（61）は、直線的にのびる体部をもち、口縁部内面に沈線の認められないことから、和泉型に分類できる。口径15.0cm、器高6.0cm、底径6.0cmに復元される。遺存状態が悪く、調整の観察は困難であるが、内外面とも密にヘラミガキ調整が認められる。尾上実氏のI-3期と考えられる。

東側第IV層土器群出土土器（第16図62～68）

II区東側の水田埋土上面で検出された土器群である。完形品に復元できるものはほとんどなく、水田に関する祭祀行為というよりも、単純な破損品の廃棄にともなって形成されたと思われる。

瓦器碗（62）は、口縁部内面に沈線をもたない和泉型に分類できるもの。口径16.4cm、器高6.1cm、

底径7.5cmをはかる。遺存状態が悪く、調整の観察は困難であるが、内外面ともヘラミガキ調整が施されていると思われる。外面にはヘラミガキの下に、ヘラケズリ調整が観察される。全体に炭素のかかりが悪く、内外面とも淡灰褐色を呈する部分がある。

(63)は、口縁内面に沈線をもち、楠葉型に分類される。口径15.0cm、器高6.1cm、底径5.4cmに復元される。内面は密にヘラミガキ調整が施されているが、外面の調整は器表面の磨滅のため観察できなかった。

土師器壺(64)は、口径15.4cmに復元される。体部外面には指オサエの指頭圧痕が認められる。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まないが、赤色粒が目立つ。

土師器大皿(65)は、口径14.8cm、器高3.3cmに復元される。圓化していないが、外面には口縁部から底部にかけて粘土接合痕が観察される。胎土は精良で、淡灰褐色を呈する。内面および口縁部外面の一部に煤が付着している。

土師器小皿(66~68)は、「て」の字状口縁におおむね分類できるものである。(68)は、口縁部の作りがかなり粗雑になっている。いずれも口径は、9.0~10.0cmに収まる。胎土はいずれも砂粒をほとんど含まない精良なもので、淡橙白色を呈する。

滑石製石鍋(図版8-69)

II区N層上面で、滑石製石鍋が1点出土している。木戸雅寿氏の分類のII-b類に属する¹⁰。

註

- 大阪府立弥生文化博物館学芸員 宮崎泰史氏の鑑定による。
- 橋本久和「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会 1980
- 尾上 実「南河内の瓦器査」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』 1983
- 川越俊一「大和地方出土の瓦器査をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』 1983
- 近江俊秀「大和地方出土の瓦器査とその生産について」『考古学論叢』第14冊 1990
- 森田 勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
- 藤本史子「淀川河川敷採集の遺物」『寝屋川市史』第2巻 1993
- 濱田延充編『長保寺遺跡』 寝屋川市教育委員会 1993
- 濱田延充編『高柳遺跡』 寝屋川市教育委員会 1991
- 塩山則之編『神田東後遺跡』 寝屋川市教育委員会 1989
- 木戸雅寿「石鍋の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 1993

第5章　まとめ

今回の発掘調査では、寝屋川市西部の歴史を考える上で重要な資料を得ることができた。

まず、平安時代後半～鎌倉時代にかけての遺構を検出し、池田西遺跡の範囲が北東に広がることが明らかになった。従前の府営住宅調査地では若干の遺物の出土にとどまり、不明であった当該期の集落の存在が判明した。ただし、遺構の分布密度は低く、集落の実態の解明には、周辺における今後の調査の進展を待たねばならない。

出土遺物については、いくつかの良好な資料を得ることができた。特にⅠ区北側の溝1・土坑1や試掘No1トレーナー出土土器は、瓦器碗出現期の様相を良く示すものである。瓦器碗には楠葉型を中心とし和泉型が含まれており、両者の関係を知ることができる良好な資料である。共伴する土師器小皿は、「て」の字状口縁を呈するものばかりである。同様な資料として、門真市西三荘遺跡の灰の詰まった穴出土資料があげられる¹⁾。

Ⅰ区南側の柱穴群の分布範囲の各遺構から出土している土器は、上記資料に続く12世紀のものである。土師器小皿には、「て」の字状口縁のものが見られなくなる。

Ⅰ区土坑2は、13世紀後半の一括資料である。瓦器碗・土師器小皿とも小型化し、調整も粗雑な印象を与えるものである。

特殊な遺物としては、土坑2出土の獸骨がある。前章で述べたとおり、鑑定の結果、牛の下顎骨・中足骨であることが判明した。検出状況からは、土坑埋没途中に意識的に投棄がおこなわれたと考えられる。各地の遺跡で牛・馬等の獸骨を使用した祭祀行為の跡が検出されており、本例も同様なものとして理解される。中層上面で出土している数点の完形品の土師器小皿も、この行為に関係したものであろう。

池田西遺跡では、ここ数年の発掘調査で、重要な遺構・遺物が多数検出されている。高柳廃寺跡を中心に池田から高柳にかけての地域では、弥生時代以降の遺構・遺物が検出されており、淀川左岸低地の茨田郡域の中で早くから安定した土地となっていた可能性が高い。当地域の遺跡のように各時期の遺構が検出されている複合遺跡は、茨田郡域ではほとんど無く、この地域の拠点として機能していたと考えられる。藤澤一夫氏の想定する²⁾茨田郡衙の発見も含めて、今後この地域に注目して調査にあたる必要があろう。

註

1. 宇治原靖泰『門真市橋波口遺跡発掘調査概要』門真市教育委員会 1992

2. 藤澤一夫「寝屋川市域の古代寺院」『寝屋川市誌』 1966

〔付載〕太秦高塚古墳の墳丘測量調査

太秦高塚古墳は、本市太秦高塚町に所在する古墳である。古墳の所在する太秦は、市域の東部に位置し、生駒山地から派生する丘陵上にある。太秦には、「モロ塚」・「トノ山」などの古墳に関連する地名が残されており、多数の古墳が存在したことが推定される。これらの古墳は、農地・宅地の造成、浄水場の建設等によって破壊され、本古墳が現存する唯一の古墳となっている。

本古墳は、平成9年11月3日に市指定文化財（史跡第1号）に指定されたが、指定にあたっての検討資料および将来の調査・整備にむけての基礎資料を作成する目的で、墳丘測量調査を実施した。測量は、教育委員会文化振興課文化財保護係塙山則之・濱田延充を担当者として平成9年8月7～19日に実施した⁽¹⁾。

古墳は、大阪市豊野浄水場に隣接して存在し、周濠の外側ぎりぎりが保存されている。古墳の現状は、雜木林となっているが、南側裾部には鳥居の礎石と思われる円孔のある石が一対あり、以前は墳頂部に祠のようなものがあった可能性がある。墳頂部は、東・南側の一部を残して大きくえぐられている。これが盜掘によるものかについては、不明である。

測量の結果、古墳は全長35m、高さ5mの円墳であることが判明した。墳丘の裾に幅5～6m、深さ1～1.5mの濠が巡っている。墳頂部より北・西側に土砂の流出が認められ、この部分の等高線の乱れも大きい。この部分は周濠にもかなりの量の土砂が流入しており、かなり浅くなっている。北側に造出し状の突出部が認められるが、これも土砂の流出によるものと思われる。これに比して、東・南側では、墳丘の保存状況は良好で、段築のテラス部分と考えられる平坦部も観察される。標高47mと49mあたりに平坦部があり、これをテラス部分とすると、墳丘は3段築成に復元できる。

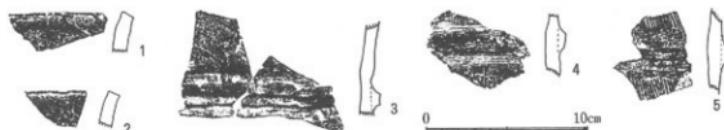
古墳の周辺の地形は、造成工事等によって変更が著しく明らかでないが、等高線は西から東にゆるやかに下がっており、旧地形図や隣接する大阪市豊野浄水場での試掘調査の成果を参考にすると、古墳の東側には深く切れ込む谷が存在し、北にのびる尾根の稜線のやや東側に古墳は築かれていると思われる。

墳丘は落葉によって覆われており、封土の露出しているところは少なく、葺石や埴輪列の状況は不明である。測量調査時に、北側周濠外側で円筒埴輪片を20点程度採集した。円筒埴輪は外面が縦ないし斜め方向のハケメ調整が施されおり、無黒斑で硬く焼上げられている。川西宏幸氏の編年の5期⁽²⁾に相当するであろう。この埴輪を本古墳に伴うものとすれば、古墳は周堤をもち、その部分に円筒埴輪列が巡っていることになる。

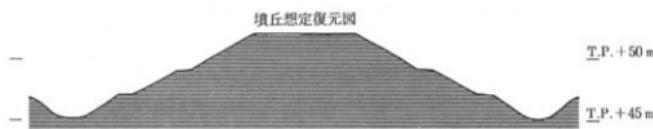
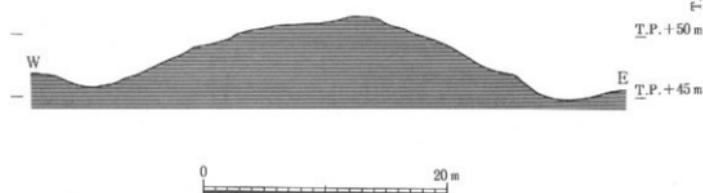
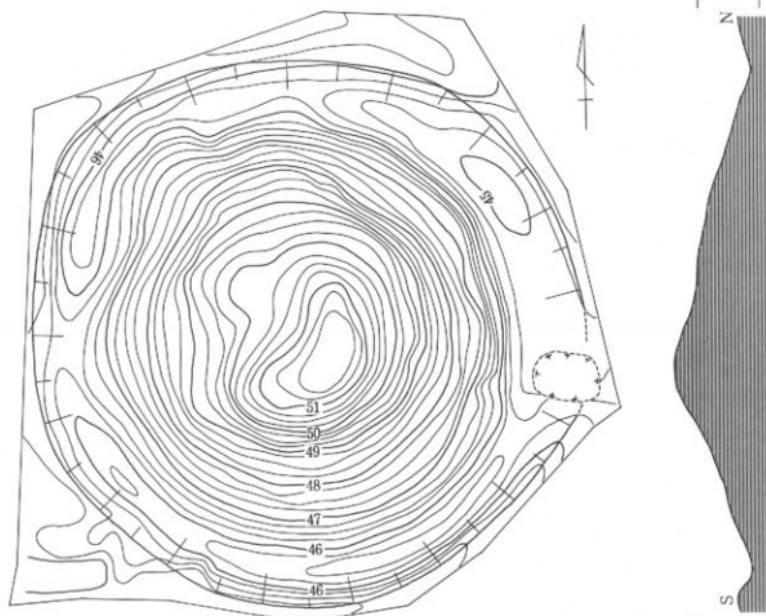
註

1. 測量調査の実施にあたっては、木下集、谷本由紀、鍋島真弓美、林美穂の参加を得た。

2. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978



高塚古墳 周濠外側出土埴輪 ($S = 1 : 3$)



太秦高塚古墳墳丘測量図 (S = 1 : 400)

報告書抄録

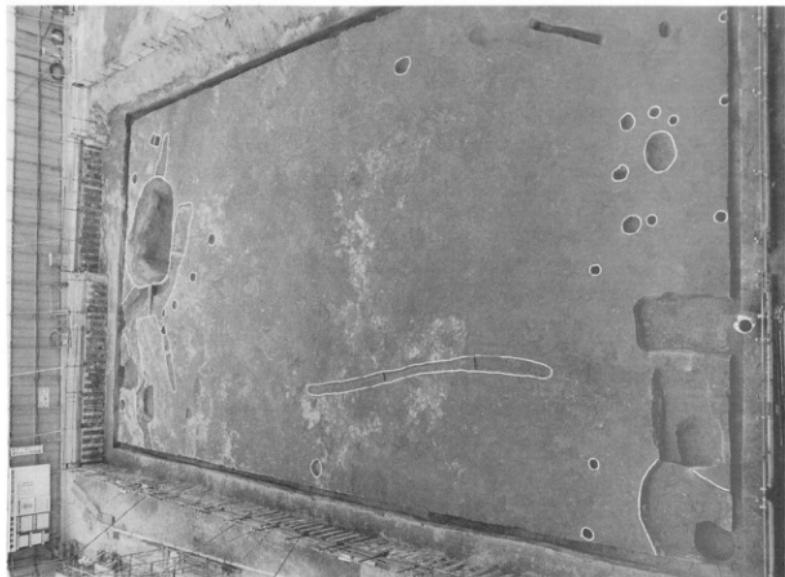
ふりがな	いけだにしいせき							
書名	池田西遺跡							
副書名	市立保健福祉センターおよび西老人福祉センター建設に伴う発掘調査概要報告書							
卷次								
シリーズ名	寝屋川市文化財資料							
シリーズ番号	24							
編著者名	濱田延光							
編集機関	寝屋川市教育委員会							
所在地	〒572-8511 大阪府寝屋川市錦町8-13 TEL 0720-38-0188							
発行年月日	西暦 1998. 3. 31							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
いけだにしいせき 池田西遺跡	寝屋川市 池田西町	市町村	遺跡番号	34° 46' 05"	135° 36' 50"	1996 7.26～ 1996 9.3	1500m ²	福祉施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
池田西遺跡	集落遺跡	平安～ 鎌倉時代	柱穴・溝 土坑・水田	瓦器・土師器 瓦・石鍋 獸骨				

図 版

図版1 検出遺構(1)



b. I区調査区全景（南から）



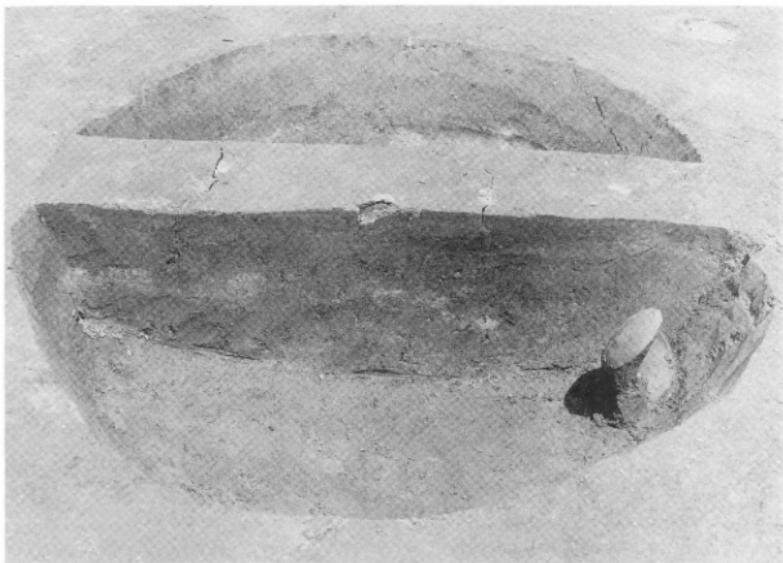
a. I区調査区全景（南から）



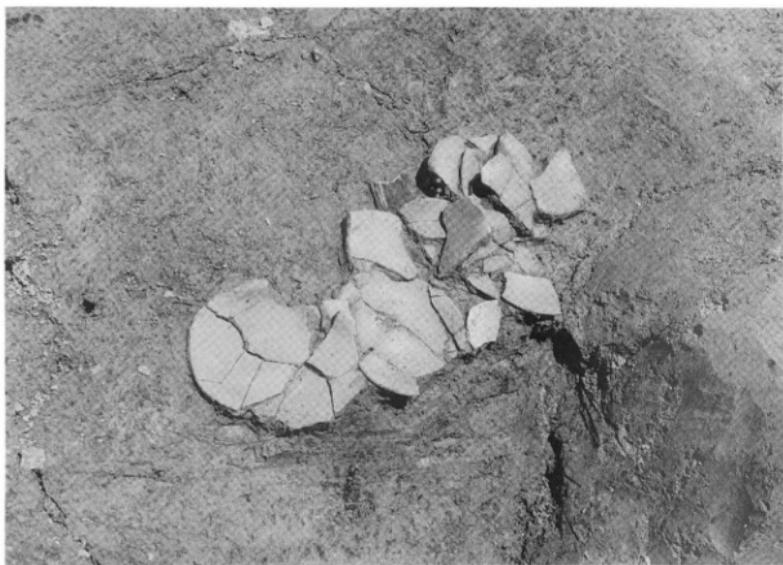
a. I区土坑2 南北土層断面（西から）



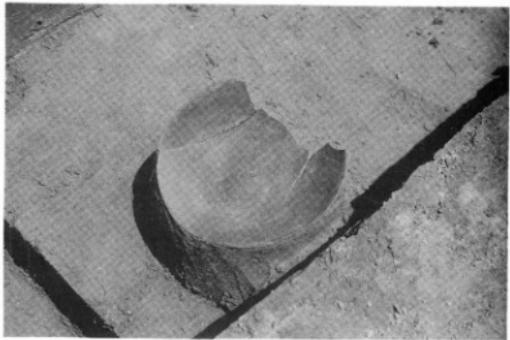
b. I区土坑2 完掘状況（北から）



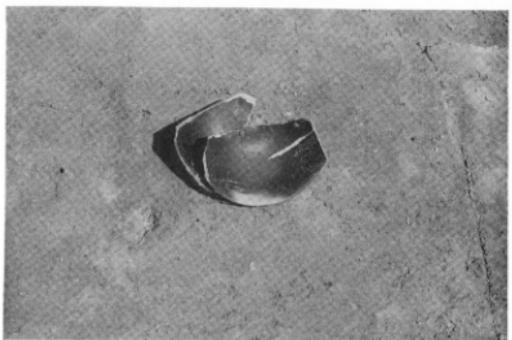
a. I区土坑3 検出状況（西から）



b. I区土器窯 検出状況（南から）



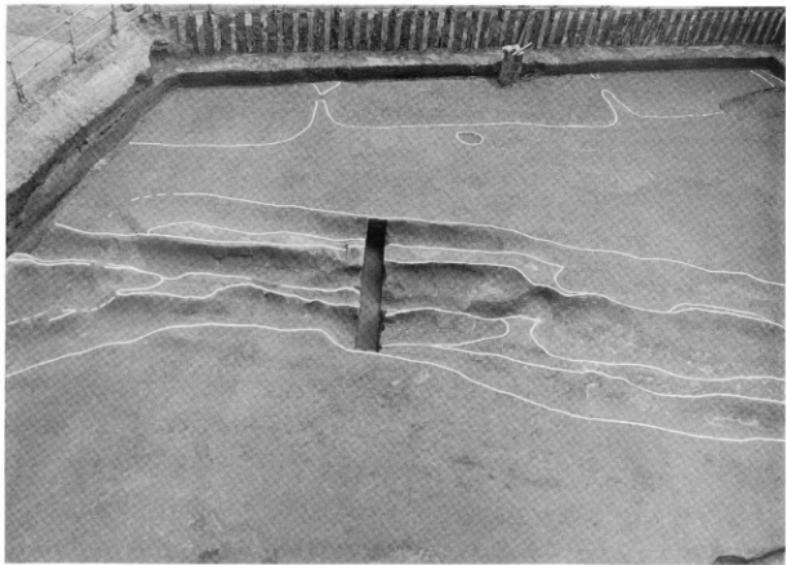
a. I区北側溝内（土坑1）瓦器碗出土状況



b. I区土坑1 瓦器碗出土状況



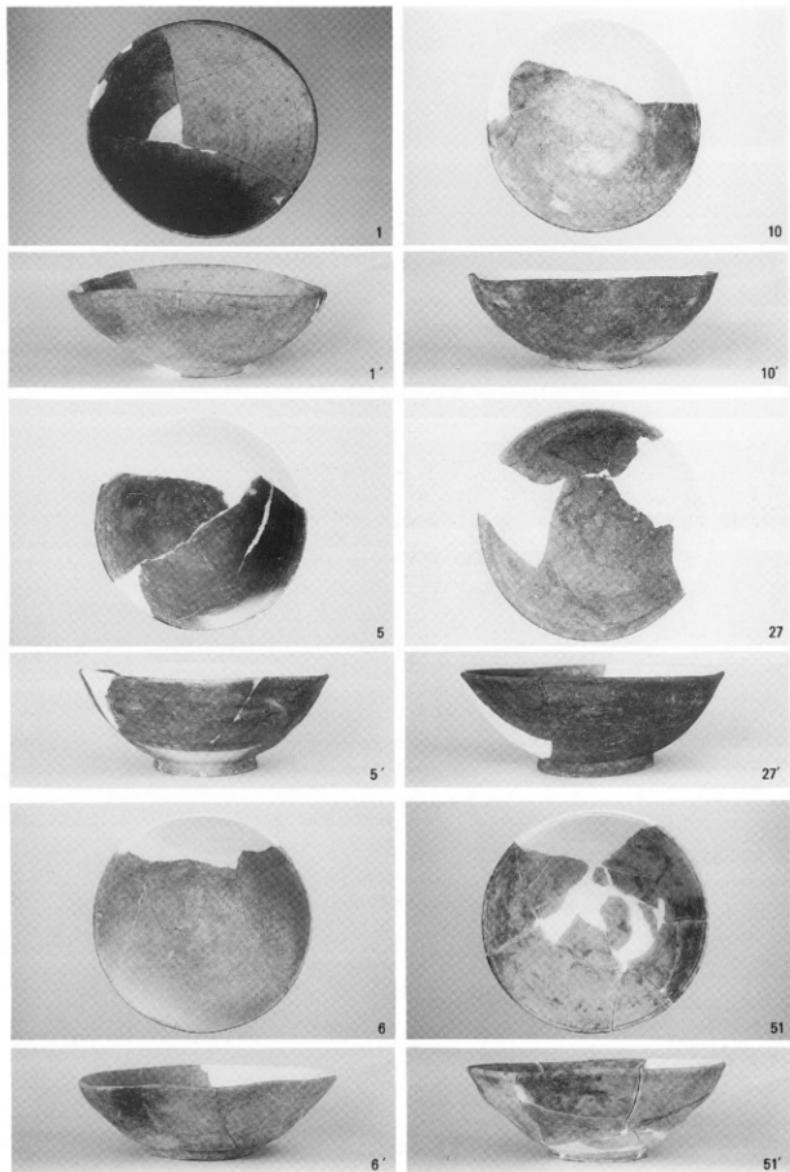
c. I区土坑2 牛下顎骨出土状況



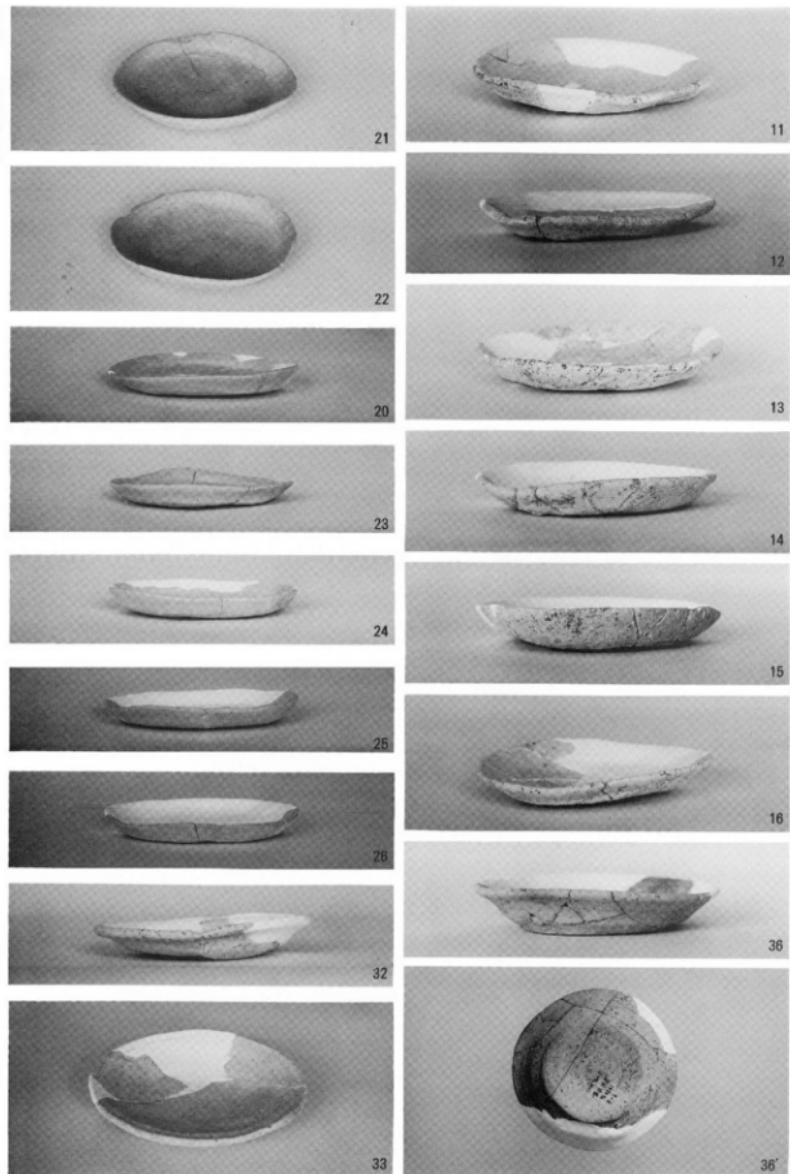
a. II区大溝 検出状況（西から）

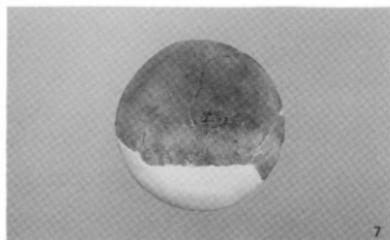


b. II区大溝 東西サブトレーンチ断面（南東から）



瓦器碗





7



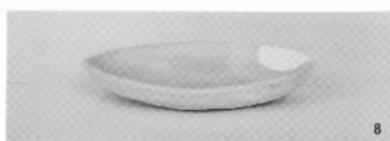
59



7'



59'



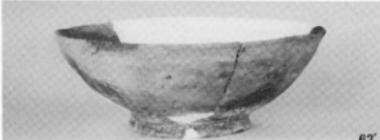
8



62



9



62'



71



65

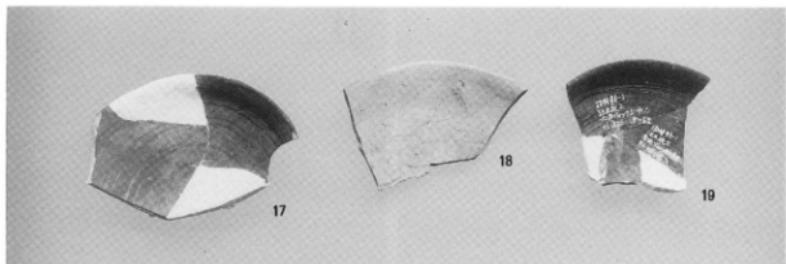


69

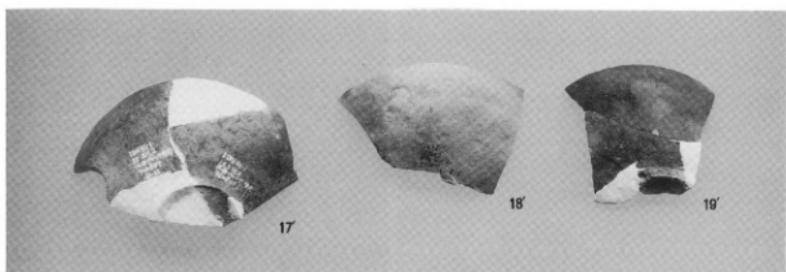


67

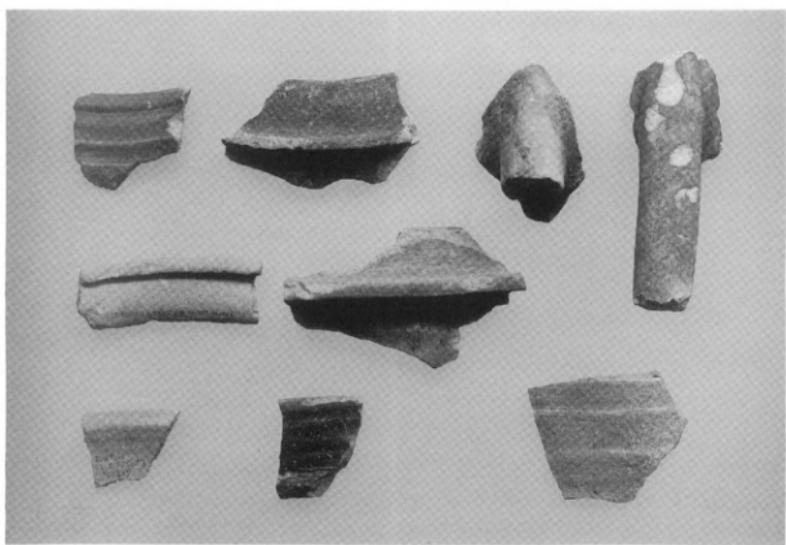
土師器皿・瓦器挽・土製かまと・滑石製鍋



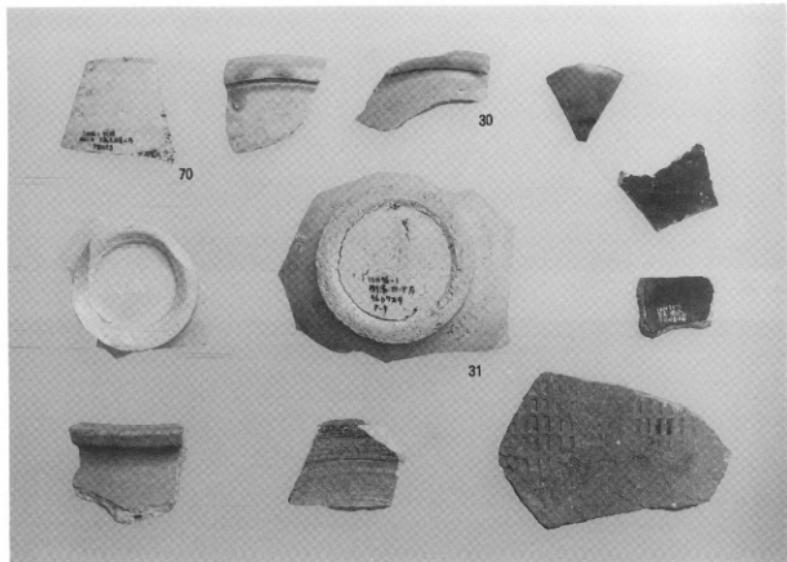
a. 瓦器椀 (I区土坑2)



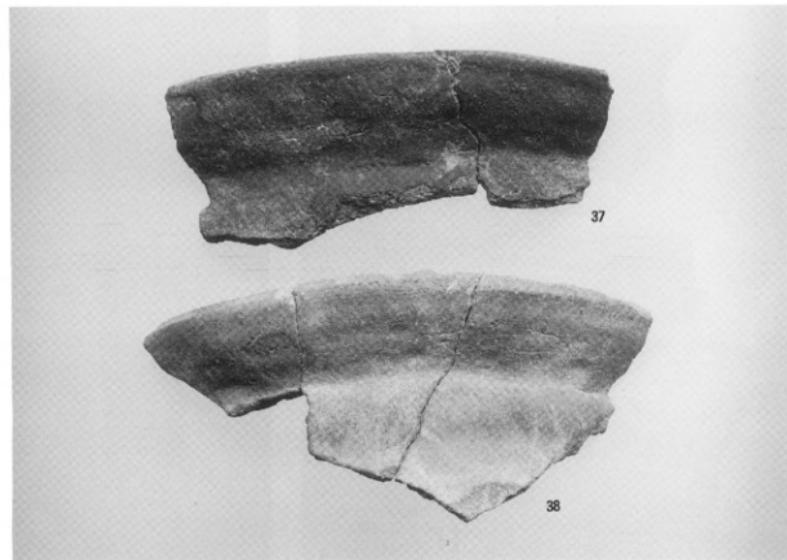
b. 同上 外面



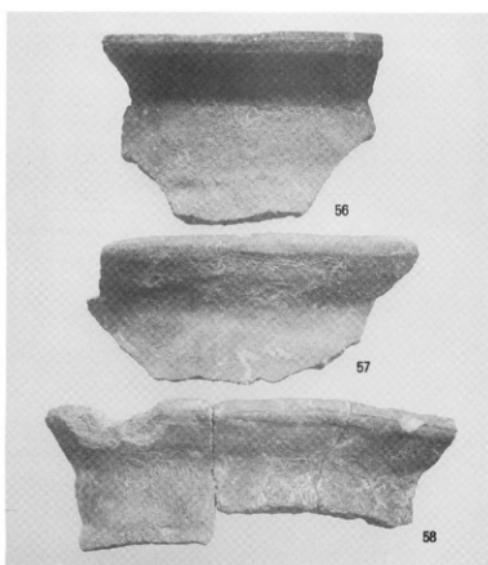
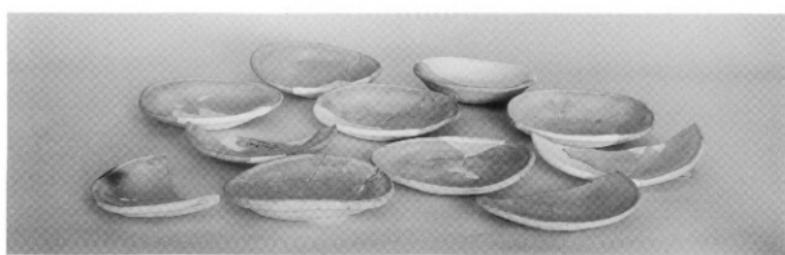
c. 羽釜・鉢・壺ほか (I区土坑2)



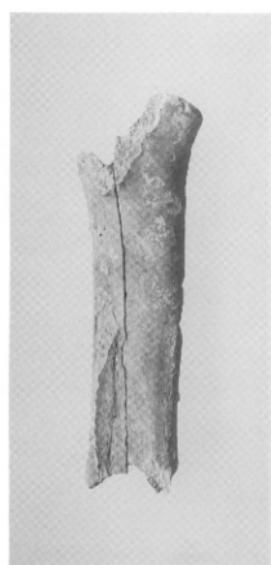
a. 白磁・青磁・陶器はか



b. 土器はか(I区包含層)



c. 土師器皿 (試掘調査No.1 トレンチ出土)



d. 獣骨 (牛)

池田西遺跡

市立保健福祉センター及び市立西老人福祉センター

建設工事に伴う発掘調査概要報告書

1998. 3

編集 寝屋川市教育委員会

発行 寝屋川市錦町8-13

印刷 株式会社日東印刷

